高齢者における洪水災害後の PTSD 症状発現の特徴

災害前の健康状態と地域交流の程度に注目して

○高岸幸弘¹・安部幸志²・板山昂³

(¹熊本大学教育学部・²鹿児島大学法文学部・³関西国際大学人間科学部)

キーワード：自然災害・PTSD・高齢者

Characteristics on development of PTSD symptoms after suffering from flooding disaster among elderly people

Yukihiro TAKAGISHI¹, Koji ABE² and Akira ITAYAMA³

(¹Faculty of Education, Kumamoto Univ., ²Faculty of law, economics and humanities, Kagoshima Univ., and ³School of Human Sciences, Kansai University of International Studies)

Key Words: natural disaster, PTSD, and elderly

目 的

大きな災害の被災によるその後の PTSD 症状の発症は、その災害規模が大きければ大きいほど深刻であることが報告されている(Maes et al., 2001)。しかしながら、近年では被災規模に関わらず（人的被害含む）、特に高齢者の集落などは復興に困難が生じたり、心理的な被害が大きかったりすることが報告されており、災害の規模のみによる事態の理解は適切な援助につながらないといえる (Abe et al., 2016)。

本研究では、2014 年に兵庫県丹波市で起きた大雨と洪水によって被害を受けた地域の住民を対象に、アンケート調査を行った。対象とした地域は、住民のほとんどが高齢者であり、洪水被害そのものはそれほど大きく報道されなかったが、物理的な復興がスムーズに行われていない地域である。

これまでの調査研究では、死者数やけが人の数は甚大と言われるほどではなかったものの（それぞれ 1 名と 4 名）、3 割以上の住民が中程度から深刻なうつ症状を呈していたことが報告されている (Abe et al., 2016)。特に住民とのつながりを表すソーシャルキャピタルが乏しい場合にはうつ症状が上昇していた。本研究では、PTSD 症状（侵入・回避・過覚醒）に注目し、ソーシャルキャピタルを含む、その他どのような要因が PTSD 症状の発現に影響しているかを調べた。

方 法

大雨による洪水被害を受けた兵庫県丹波市の A 地区で全住民 289 名（男性 136 名、女性 153 名）を対象に、災害発生の 12 ヶ月後にアンケート調査を実施した。

アンケートでは、性別・年齢といった人口統計学の値と、PTSD 症状を測定する IES-R、抑うつ症状 15 項目 2 件法、主観的不健康度・日頃の悩み（の量）についてそれぞれ 1 項目 5 件法と 4 件法で、近所づきあいや地域行事への参加などソーシャルキャピタルの有無を 4 項目 2 件法で回答を求めた。

結 果

アンケート調査の結果、IES-R の得点が PTSD 発症の判断の 1 つの基準となるカットオフポイントの 25 点以上だった回答者は全体の 34.0% (n=109) であった。

(1) 相関分析

IES-R 得点は高齢、不健康度、日頃の悩みと正の相関がみられ、ソーシャルキャピタルとは負の相関がみられた。ソーシャルキャピタルは全ての変数と負の相関がみられた。高齢は不健康度と正の相関があった一方で、日頃の悩みとは有意な相関がなかった。

(2) 共分散構造分析 (SEM)

共分散構造分析に先立ち、各変数の性差を t 検定で確認したところ、有意な差はみられなかった。

その後アウトカムとして抑うつ症状とトラウマ症状を設定し、理論の見地から、独立変数としての年齢、日頃の悩み、主観的不健康、ソーシャルキャピタルを下図のように配置した SEM を行った。有意でないパスを削除し解析を繰り返した結果、抑うつ症状には年齢を除くすべての変数からのパスが有意となっていたが、トラウマ症状には日頃の悩みと主観的不健康度からのパスおよび年齢からの直接的パスが有意であり、ソーシャルキャピタルは有意ではなかった。

考 察

IES-R のカットオフポイントを上回る回答者が 3 割を超えていたことは、災害の被災規模が表面的には甚大ではない災害であったとしても、被災者の心理的ダメージは大きい可能性があることを示しており、介入時には考慮すべきことだと言える。

先行研究では、抑うつ症状をアウトカムとした場合、ソーシャルキャピタルはその発現に影響を及ぼす重要な因子であったが、PTSD 症状ではソーシャルキャピタルよりも、もとの健康状態や日頃の悩みの多さがその発現に影響していた。単純な相関では、ソーシャルキャピタルは PTSD 症状と負の関係にあったが、SEM では、年齢や健康状態といった身体的要因や日頃の悩みという心理的要因が影響因であった。これはうつ症状がより社会的要因の影響を受けやすいということ、そして PTSD 症状がより生物学的要因の影響を受けて発現しやすいということを示しているともいえる。

災害後の PTSD 発症を予防するためには、日頃からの健康の維持や心理的ケアが重要であるといえる。

引用文献

- Abe, K., Takagishi, Y., & Itayama, A. (2016). Depression symptoms among senior survivors of post flood-disaster area in Japan. 31st International Congress of Psychology, PS27P-07-80, 238.
- Maes, M., Mylle, J., Delmeire, L., & Janca, A. (2001). Pre-and post-disaster negative life events in relation to the incidence and severity of post-traumatic stress disorder. *Psychiatry research*, 105, 1-12.